ねこの結婚式

安房直子・作　いもとようこ・絵

ねこの結婚式

けっこんしき

安房直子・作　　いもとようこ・絵

「こんなおおげさなこと、ほんとは、するつもり、なかったんですけどね」

そんなことをいいながら、のらねこのギンが、ぼくのところに一まいの招待状をとどけてきました。

のどかな日曜日の朝のことです。

ぼくは、えんがわのいすにすわって、新聞を読んでいました。ぼくのひざの上では、ねこのチイ子が、すやすやとねむっていました。チイ子は、もともと、すばらしくきれいな白ねこなのですが、ぼくが、毎朝ていねいにブラシをかけてやっているおかげで、その毛なみはいよいよかがやきわたり、まるで、白いビロードのようにみえるのです。

このチイ子にくらべたら、そこらへんのねこたちは、下品できたならしくて、もう話になりません。とくに、ぼくのところに毎日無断で出入りしている、こののらねこのギンなんかは、もともと何色のねこなのか、見当もつかないほどよごれていて、きずだらけで、目ばかりいやらしく光っているのでした。

ところが、そのギンが、今日にかぎってシャワーでもあびたみたいに、さっぱりした体でやってきたのです。

「どうしたんだい？　いったい」

と、ぼくがたずねますと、ギンは、前足をそろえて、それはもったいぶったようすで、

「じつは、こんど結婚することになりまして」といいました。

「ほう、そりゃけっこうだね」

と、ぼくはうなずきました。

ねこだって、結婚ぐらいするでしょう。

ちょっとあいそ笑いをしてから、ぼくはまた、新聞に目を落としました。

するとギンは、おこったような声で、

「そのふうとう、開けてみてくださいよ」

といいました。

気がつくと、ぼくは、右手に、さっきギンからもらった白いふうとうを持っていたのです。ふうとうの上には、黒い字で、
〈ご招待〉と書かれてありました。
「へえ、結婚式、あげるのかい」
ぼくは、ちょっとびっくりしました。すると、ギンは目をぱちぱちさせて、ひと息にいいました。
「ええ。こんなおおげさなこと、ほんとはぼく、するつもりなかったんですけどね、
彼女の方が、このさい、どうしても、花よめいしょう着たいっていうもんですから」
ふんふんとうなずきながら、ぼくは、ふうとうを開けてみました。中には、白い四角いカードが入っていて、
こんなことが書かれていました。

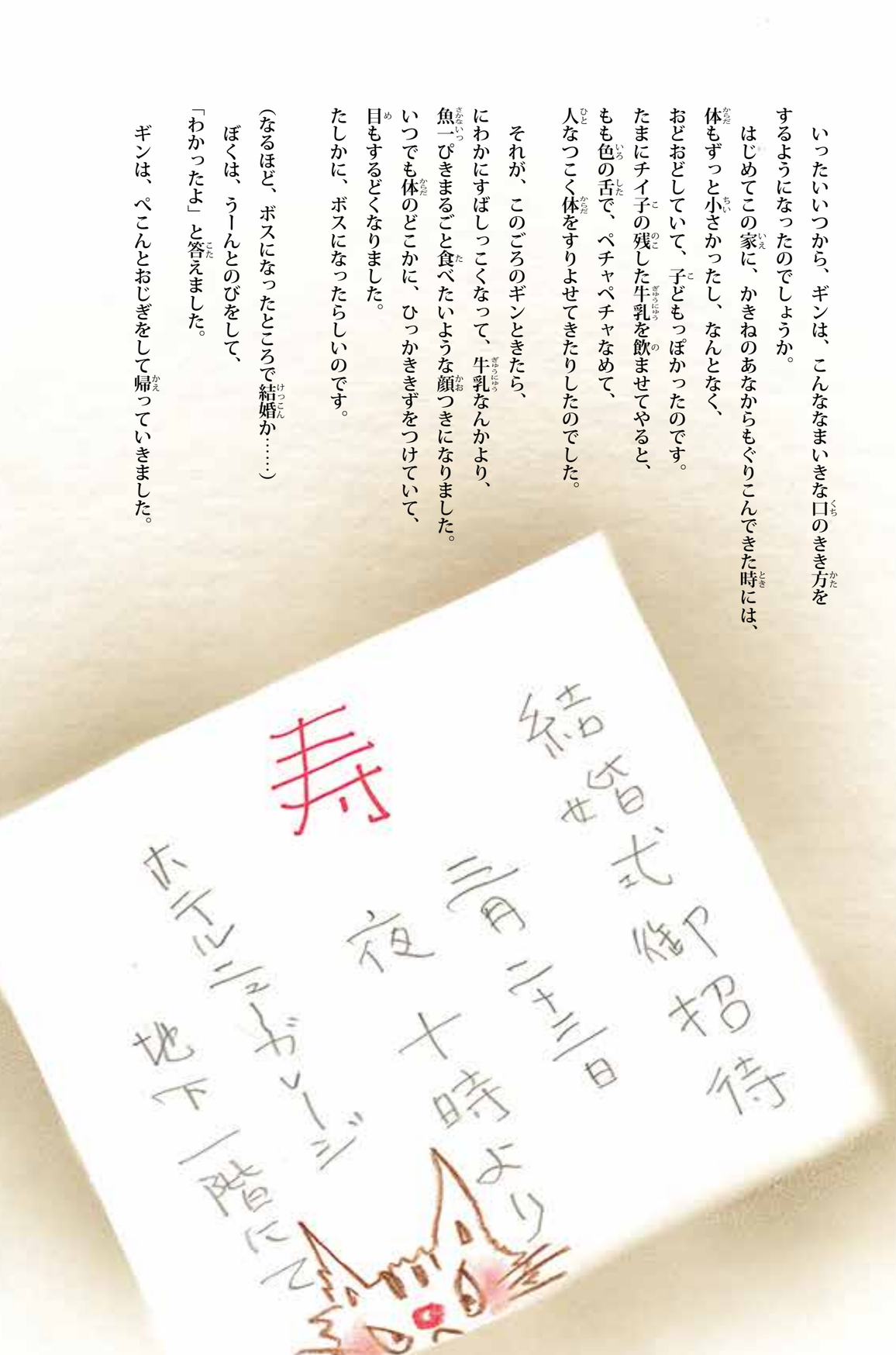
寿
結婚式ご招待
三月二十三日、夜十時より
ホテルニューガレージ　地下一階にて

「ホテルニューガレージっていうのは……どこだっけ……」
ぼくが考えていますと、ギンは、かきねのむこうをあごでしゃくって、小さい声で、
「ほら、すぐそこの空地ですよ」と、いいました。
「空地って、駐車場かい？」
「そうです。あすこの、地下一階です」
「駐車場に、地下なんかあるわけないじゃないか」
「いいえ。あるんです。ひみつの階段おりたところに、ひみつの宴会場があるんです。そこへ特別にあなたをご招待しますから、
どうぞこっそりと、ひとりできてください。たったひとりの人間として、ぼくの門出を祝福してやってください」

いったいいつから、ギンは、こんななまいきな口のきき方を
するようになったのでしょうか。
はじめてこの家に、かきねのあなからもぐりこんできた時には、
体もずっと小さかったし、なんとなく、
おどおどしていて、子どもっぽかったのです。
たまにチイ子の残した牛乳を飲ませてやると、
もも色の舌で、ペチャペチャなめて、
人なつこく体をすりよせてきたりしたのでした。

それが、このごろのギンときたら、
にわかにすばしっこくなって、牛乳なんかより、
魚一ぴきまるごと食べたいような顔つきになりました。
いつでも体のどこかに、ひっかききずをつけていて、
目もするどくなりました。
たしかに、ボスになったらしいのです。

（なるほど、ボスになったところで結婚か……）
ぼくは、うーんとのびをして、
「わかったよ」と答えました。
ギンは、ぺこんとおじぎをして帰っていきました。



三月二十三日は、あいにく雨でした。
いったい、どういう低気圧の影響でしょう、朝からどしゃぶりで、夕方には風も出てきました。
よりにもよって、こんな日に結婚式だなんて……ぼくは、あの日のギンの顔つきを思いうかべて、ちょっと気のどくになりました。
ギンも気のどくですが、招待客も気のどくです。いくら、となりの空地までだって、こんな晩の外出は、本当におっくうです。どうしようかなと、ぼくがまよっていますと、電話のベルが鳴りました。
「もしもし、ぼく、ギンですが」
受話器をはずすやいなや、せきこんだギンの声が聞こえてきました。ぼくが返事もしないうちに、ギンはひと息にしゃべりまくりました。
「あいにくの天気になりましたが、予定どおり披露宴をいたしますから、まちがいなくおこしください。お客は、もうぽつぽつ集まっています。平服でけっこうですから、どうぞ、すぐおいでください」
「……」
ぼくの足の上では、チイ子がうずくまっていました。チイ子はこのところ元気がなくて、めったに外出しませんし、食欲もないようです。ぼくは電話を切ってから、チイ子にいいきかせました。
「ねえ、チイ子、ぼくはちょっとでかけてくるからね。これから、ギンの結婚式なんだ。すぐ帰るつもりだけど、おそくなったら、先にねてなさい」
チイ子が小さな口を開けて、かすかに返事をしましたので、ぼくはかさをさして、でかけることにしました。
ぼくの服装は平服も平服、セーターによれよれのズボンです。そのうえ、げたばきで、かさはほねが一本折れています。

外に出て、そのかさを開くと、雨はばらばらとはげしい音をたてました。本当にひどい日になったものです。

ところが、ぼくが家の門を出て、となりの空地の方へ歩きはじめますと、うしろでいきなり

「まったく、とんでもない天気で」と、だれかがいいました。

びっくりしてふりむくと、小さな黒いかたまりが、ひゅっと、ぼくを追いぬいていきました。

よくみると、ねこです。

黒ねこが、黒いレインハットなんかかぶって、いちもくさんに、となりの空地へ行くところです。

ぼくがあっけにとられていますと、またうしろで、

「あいにくの天気ですね、お先にしつれい」

という声がします。

ふりむくとこんどは、白っぽいねこが三びき連れだって、ぼくを追いぬいていきました。三びきのねこも、やっぱり、レインハットをかぶっていました。このごろは、ねこも、あんなのかぶるようになったのかなと、ぼくが思っていますと、もうあとからあとから、レインハットをかぶったねこたちが、ぼくを追いぬいていくのでした。

「お先にしつれい」

「お先にしつれい」

「お先にしつれい」

白ねこもいれば、ぶちねこもいます。

大きいのも小さいのも、中くらいのもいます。

なるほど、ボスの結婚式だけあって、招待客の多いこと多いこと……。

ぼくは、すっかり感心してしまいました。

駐車場には、街灯がひとつ、ともっていました。

そのまるい光に照らされて、そこだけはげしい雨の線がはっきりみえます。それにしても、この空地のいったいどこに、地下へおりる階段なんかがあるのでしょうか——。

ぼくがためらっていますと、「こちらですよ」と声がして、
まるい光の中に、やっぱりレインハットをかぶった、うす茶色のねこがあらわれました。
「さあ、さあ、こちら」
うす茶のねこは、ぼくを案内しにきたらしく、先に立ってずんずん歩きはじめました。
そのてらてらと光るレインハットのあとを、ぼくが追いかけていきますと、
ねこはシートをかぶった車のうしろに、するりとかくれました。
あとをついていくと、車のかげには、ぽっかりとマンホールほどのあなが開いていて、
そこから地下へ続く階段がみえました。
あなの下からは、だいだい色の光が、ほのかにこぼれています。
かがんで耳をすますと、おごそかなオルガンの曲までひびいてきます。
「さあ、さあ、こちら」
茶色いねこにいわれるままに、ぼくはそこで、かさをつぼめて、階段をおりはじめました。
階段は細くて、急で、びっしょりぬれていました。
階段を、ちょうど二十段おりたところに、ちょっとした広間がありました。
オレンジ色の光は、その広間のかべと天井にともされていた灯りだったのです。

「こちらが、ひかえ室でございます。
お客さまは、もう、みんな宴会場の方へ
おうつりになりました」
茶色のねこは自分のレインハットをぬいで、
かべのぼうしかけにかけながら、そういいました。
気がつくと、そのかべには、ずらりと一列に
レインハットがならんでいるのです。
その数は、もうかぞえきれません。
「おどろいたねえ。これは、たいへんなお客だねえ」

ぼくは、自分のかさをいちばんはしっこの
ぼうしかけにぶらさげて、
茶色のねこのあとについて、
となりの宴会場へ急ぎました。

宴会場のドアは、ギイと音たてて、ひとりでに内側に開きました。
きっと、あなの上からふきこんできた風のせいでしょう。
そこはたいして広くない部屋でしたが、シャンデリア風の電灯が上からぶらさがっていて、三列ほどならんだテーブルには、ぎっしりいっぱいのねこたちが、ぎょうぎよくすわっていました。
「こちら、こちら」
案内役の茶色いねこは、ぼくを右はしの席に案内します。
それにしても、ずいぶんすみっこの、これは末席じゃないかとぼくが思った時、部屋じゅうのねこたちが、いっせいにパタパタと拍手しました。
「新郎新婦のご入場でございます」
正面のとびらが、さあっと両側に開きました。ぼくは席にすわって、あわてて拍手しました。
ギンのやつ、どんなよめさんもらったんだろうと、ぼくは目をこらしました。
バッハのオルガンに合わせて、おごそかに部屋に入ってきたギンは、黒い服に銀のネクタイです。
ひげもほどよい長さに切りそろえてあって、毛なみはつややかで、目やになんかついてないし、まったくみちがえるほどです。ぼくは、思いきり拍手をしてやりました。
けれども、そのうしろから、うつむいてしずしずと入ってきた白いドレスの花よめを、ひと目みたとたん、ぼくの両手は、はたりと動かなくなりました。

作●安房直子（あわ なおこ）

1943 年、東京生まれ。日本女子大学国文科卒業。『さんしょっ子』で日本児童文学者協会新人賞、『風と木の歌』で小学館文学賞、『遠い野ばらの村』で野間児童文芸賞、『山の童話　風のローラースケート』で新美南吉児童文学賞、『花豆の煮えるまで　小夜の物語』でひろすけ童話賞など数多くの賞を受けた。1993 年逝去。
『やさしいたんぽぽ』（小峰書店）『だんまりうさぎとおしゃべりうさぎ』（偕成社）『はじめてよむ日本の名作絵どうわ 4 きつねの窓』（岩崎書店）など、その独特の世界観は高く評価され、没後も多くの作品が刊行されつづけている。

絵●いもとようこ

兵庫県生まれ。金沢美術工芸大学油画科卒業。『ねこのえほん』『そばのはなさいたひ』でボローニャ国際児童図書展エルバ賞を 2 年連続受賞。『いもとようこうたの絵本 1 』で同グラフィック賞受賞。2015 年パリとボローニャで絵本原画展を開催。
『おふろ』『いろ』『まいにちがプレゼント』『心ってどこにあるのでしょう？』『スーフと白い馬』「大人になっても忘れたくない　いもとようこ名作絵本」シリーズ（以上金の星社）、『ほたるとばらの花』（ひかりのくに）など、赤ちゃん向けから名作まで作品多数。

＊本書は『童話集 遠い野ばらの村』（筑摩書房・1981 年刊）掲載「猫の結婚式」を底本としておりますが、著作権継承者の方のご了解をいただき、用字用語、読点などは読みやすさを考慮して小社の基準を用いています。作品の雰囲気を変える可能性のある言葉などについては、あえて統一せず底本のままといたしました。

ねこの結婚式

初版発行／ 2019 年 9 月

安房直子／作　いもとようこ／絵

発行所　株式会社 金の星社　〒 111-0056　東京都台東区小島 1-4-3　TEL 03-3861-1861 (代表)　FAX 03-3861-1507　振替 00100-0-64678
製版・印刷　株式会社 廣済堂　製本　株式会社 難波製本　■ 32 ページ　31cm　NDC913　ISBN978-4-323-04802-4

■乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社販売部宛にご送付ください。送料小社負担でお取り替えいたします。
ホームページ　https://www.kinnohoshi.co.jp
© Toru Minegishi & Yoko IMOTO 2019, Published by KIN-NO-HOSHI SHA Co.,Ltd, Tokyo JAPAN

JCOPY 出版者著作権管理機構 委託出版物
本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088　FAX03-5244-5089　e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。　※ 本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。